

ワーズワスとエクローグとエコロジー : ichaelの 「パストラル」をめぐって

山内, 正一
福岡大学

<https://doi.org/10.15017/5439>

出版情報 : 言語文化論究. 15, pp.123-138, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

ワーズワスとエクローグとエコロジー

— *Michael* の「パストラル」をめぐる —¹⁾

山内正一

英文学史上一時代を画することになる *Lyrical Ballads* には四つの版（1798年版、1800年版、1802年版、1805年版）がある。当初一巻本として出版された時、この詩集のタイトルは“*Lyrical Ballads, With a Few Other Poems.*”であった。同詩集が二巻本に姿を変えて再版された時もほぼ同じタイトル（“*Lyrical Ballads, With Other Poems.*”）が用いられた。だが、第3版ではタイトルは微妙に変わって“*Lyrical Ballads, With Pastoral And Other Poems.*”となり、この形は第4版にも踏襲される。注意深い読者ならば、ここに「パストラル」に対する詩人の愛着の深まりを認めることであろう。

Lyrical Ballads 第2版（1800年）には、初版には無かった“pastoral”と銘打たれた5編の詩が新たに登場する。*The Brothers, The Oak and the Broom, The Idle Shepherd-Boys, or Dungeon-Gill Force, The Pet-Lamb* そして *Michael* が件の詩群である。本論で取り上げる *Michael* は、作品の分量やその出来栄えから言っても、これら“pastoral”詩群の中では *The Brothers* と並んで双璧をなす作品と言える。また、ワーズワスの *Michael* に寄せる特別な想いは、この詩が *Lyrical Ballads* 全巻の掉尾を飾っているところからも推測できる。では、その「特別な想い」とはいかなるものであろうか。

Michael をめぐる批評は、これまで主人公の牧夫／農夫 マイケルと詩人ワーズワスの距離・関係を軸に展開されてきた節がある。もともと文学ジャンルとしての「パストラル」においては、作者の側に主人公／牧羊者との自己同一化が見られるのが慣わしである。したがって、*Michael* 批評のこの動向も当然のことと言えよう。その結果、批評家たちは各自の主張において大きく二つの陣営に色分けされることになる。まず、Hartman に代表されるグループがあり、彼らは作者と牧夫／農夫との間に一体化への強い傾向を認める。一方、もう一つの陣営を代表する Danby や Perkins は、主人公マイケルを見つめる作者ワーズワスの冷静で‘realistic’な眼差しを強調する。²⁾

本論においては、このような *Michael* 批評の流れを踏まえながらも、従来とは異なる視点 — *Tintern Abbey Lines* との密接な関係という視点 — から「ワーズワスの *Michael* に寄せる特別な想い」の内実を光を当て、「パストラル」としての作品 *Michael* の真の主題を明らかにしてみたい。³⁾

(一)

Michael の主題を論じる際に必ず引き合いに出される、詩人自身の発言が幾つかある。その一つは、ワーズワスがウィッグ党の政治家 Charles James Fox に出した手紙の中に見

られる。⁴⁾ この手紙はワーズワスがコールリッジの助言を容れ、意中の著名人たちの同情と関心を *Lyrical Ballads* 第2版へ引き寄せるために献呈本に添えて発信したものの一つであった。動機が動機であり、しかも受け取り手が政治家であれば、これはもともと政治へのバイアスの強い書簡と考えざるをえない。この書簡中でワーズワスは特に作品 *The Brothers* と *Michael* に言及し、「私がこの詩集を閣下に献呈する気になったのはこれら2編の詩のためです」と述べる。⁵⁾ さらに詩人は、近年の国家の諸施策が惹起した「このうえなく痛ましい結果」として「下層階級における家族愛の急速な衰退」を指摘し、社会構造や経済の急激な変化ならびに政府の誤った対応が原因で生じた人心の荒廃（家族愛／家庭愛の衰退）を慨嘆する。次の一節に明らかな通り、没落と墮落の瀬戸際に身を置く小地主階級（“statesmen”）を救うという共通の使命を — 詩人として政治家として — それぞれの立場で共に果たそうではないか、とワーズワスは訴えるのである。

In the two Poems, “The Brothers” and “Michael” I have attempted to draw a picture of the domestic affections as I know they exist amongst a class of men who are now almost confined to the North of England. They are small independent *proprietors* of land here called statesmen, men of respectable education who daily labour on their own little properties. The domestic affections will always be strong amongst men who live in a country not crowded with population, if these men are placed above poverty. But if they are proprietors of small estates, which have descended to them from their ancestors, the power which these affections will acquire amongst such men is inconceivable by those who have only had an opportunity of observing hired labourers, farmers, and the manufacturing Poor. Their little tract of land serves as a kind of permanent rallying point for their domestic feelings, as a tablet upon which they are written which makes them objects of memory in a thousand instances when they would otherwise be forgotten. It is a fountain fitted to the nature of social man from which supplies of affection, as pure as his heart was intended for, are daily drawn. This class of men is rapidly disappearing. You, Sir, have a consciousness, upon which every good man will congratulate you, that the whole of your public conduct has in one way or other been directed to the preservation of this class of men, and those who hold similar situations. You have felt that the most sacred of all property is the property of the Poor. The two poems which I have mentioned were written with a view to shew that men who do not wear fine cloaths can feel deeply.⁶⁾

これは、一見、作品 *Michael* の主題を言い尽くしたかに見える文章である。物語の主人公は「イングランド北部」に住まう「小地主」であり、彼と彼の家族は、父祖伝来の「小さな土地」を中心に、強固な土地愛と家族愛の力で一つに結ばれている。「この階級の人々が急速に消えていく」様子がたしかに *Michael* では痛ましくも劇的に描かれる。上の引用書簡中に頻出する「家族愛／家庭愛」を意味する語句 — “the domestic affections”, “these affections”, “their domestic feelings” — に注目したい。これら一連の語句を念頭に置いて次の文章を読むときに読者が *Michael* の主題をどのようなものと受け取るかは容易に推

測できる — 詩人曰く「先に触れた2編の詩は、粗末な服を身に纏った人間が物事を深く感じることができる(“can feel deeply”)のを示すために書かれたのです」と。おそらく読者は、文中の“can feel deeply”を‘can have deep, domestic affections’の意に解するのではあるまいか。かくして、大方の読者にとって *Michael* の中心テーマは、社会悪の犠牲者たる小地主が土地愛と家族愛の板挟みになってささやかな私有地のみならず肉親(息子)をも失っていく悲劇となる。たしかに *Michael* の大部分 (ll. 80-456) はこの悲話を語ることに費やされている。⁷⁾ だが、ここに一つの疑問が生じる。もし *Michael* が一老牧者の悲劇を語るだけのものであれば、作者はなぜこの詩に“A Pastoral Poem”(強調筆者)という副題を添え、しかも *Lyrical Ballads* 全巻の掉尾を飾る栄誉をこの作品に与えたのであろうか。この疑問を手掛かりに、*Michael* に隠されているはずの真の主題を探ることにしたい。

上の疑問を解く一つの手掛かりがワーズワスの別の書簡に見出される。それはワーズワスとコールリッジの共通の友人 Thomas Poole への書簡である。⁸⁾ ついでに述べれば、この書簡でワーズワスは次の発言も行っている — 「この詩を書く際に、私はいつも貴方の性格を臉に浮かべていました。そして、そのような境遇にあったならば貴方がなったかもしれない人物を描いているのだ、と時々思ったものです」。ここからは、主人公 マイケルが複数の人物をモデルに造形された想像上の「老人」であることが窺われる。さて、問題の一節は以下の通りである。

In the last Poem of my 2nd Volu. I have attempted to give a picture of a man, of strong mind and lively sensibility, agitated by two of the most powerful affections of the human heart; the parental affection, and the love of property, *landed* property, including the feelings of inheritance, home, and personal and family independence.⁹⁾

ここで注目したいのは、「私は、人の心に宿る最も強力な愛情の二つにかき乱された、強い精神と活発な感受性を持つ男の姿を描こうとした」という箇所である。“a man, of strong mind and lively sensibility, agitated by two of the most powerful affections of the human heart” という表現は、意味上の力点の置き方によって、二つの部分に分けて考えることができる。一つは、“a man, of strong mind and lively sensibility”の部分であり、他は“a man [who is] agitated by two of the most powerful affections of the human heart”の部分である。先に述べた「社会悪の犠牲者たる小地主が土地愛と家族愛の板挟みになってささやかな私有地のみならず肉親(息子)をも失っていく悲劇」の主人公は、まさに“a man [who is] agitated by two of the most powerful affections of the human heart”に相当する。そしてこの人物の悲劇的状況を描出するために作品 *Michael* の大半 (ll. 80-456) が費やされていることにもすでに触れた。しかし、ここで私は“a man, of strong mind and lively sensibility”の部分にこそ拘りたい。なぜならば、件の400行近い詩句がメロドラマ風に老人一家の不幸を描けば描くほど、その部分に「強い精神と活発な感受性を持つ男」の姿を認めることが困難になるからである。結論めいたことを先に言えば、*Michael* の本当のテーマは“a man, of strong mind and lively sensibility”の〈誕生〉と〈試練〉と〈成長〉と〈救済〉のドラマを描くところにある、と筆者は考える。*Michael* の第一の眼目は

“domestic affections” 故の老人の心の嵐（‘agitation’）の劇化にあるのではなく，“strong mind and lively sensibility”を發揮することによって試練を潜り抜け，“The still, sad music of humanity”（*Tintern Abbey Lines*, l. 91）を味わいうる境地に至る，嵐の後の静穏な老人像の呈示にこそあったのではなかろうか。とすれば、先の “to shew that men who do not wear fine cloaths can feel deeply” の “can feel deeply” は、単に老人の試練と苦悩の有り様を指し示すのではなく、ましてや彼の「土地愛と家族愛」の強さのみを意味するものでもない。¹⁰⁾ そこにはもっと深いワーズワス流の人間観 — と自然観 — が潜んでいるはずである。このことを検証するには作品の中心部（ll. 80-456）ではなく、むしろその周縁部に配置された詩行にこそ注意を注がねばならない。

(二)

Michael 冒頭の12行は，“A Pastoral Poem” というこの詩の副題に相応しく、絵に描いたような牧歌的世界（山間の谷間）を呈示してみせる。ちなみに、*Michael* 全編で “pastoral” なる語が実際に用いられるのはこの箇所のみである。

If from the public way you turn your steps
Up the tumultuous brook of Green-head Gill,
You will suppose that with an upright path
Your feet must struggle; in such bold ascent
The *pastoral* Mountains front you, face to face.
But, courage! for beside that boisterous Brook
The mountains have all open'd out themselves,
And made a hidden valley of their own.
No habitation there is seen; but such
As journey thither find themselves alone
With a few sheep, with rocks and stones, and kites
That overhead are sailing in the sky.

(ll. 1-12. 強調筆者)

一見立ち塞がるかの様に前方に聳える山々の懷には、羊や岩石や鶯だけが住む（ワーズワス的世界では岩石も「住む」に相応しい存在である）「谷間」（“valley”, “Dell”）が隠されている。「牧歌」の舞台としては、これは申し分ないロケーションであろう。この “pastoral Mountains” が、また “a hidden valley” が — つまりは「自然」が — 実は老羊飼いに劣らぬ作品 *Michael* の主人公であることをまず指摘しておきたい。

続く詩句（ll. 13-39）では、この「寂寥たる場所」（“an utter solitude”）にある石積み跡（l. 17: “a stragglng heap of unhewn stones”）とそれに纏わる物語への言及がなされる。

...It was the first,
 The earliest of those tales that spake to me
 Of Shepherds, dwellers in the vallies, men
 Whom I already lov'd, not verily
 For their own sakes, but for the fields and hills
 Where was their occupation and abode.
 And hence this Tale, while I was yet a boy
 Careless of books, yet having felt the power
 Of *Nature*, by the gentle agency
 Of *natural* objects led me on to feel
 For passions that were not my own, and think
 At random and imperfectly indeed
 On man; the heart of man and human life.
 Therefore, although it be a history
 Homely and rude, I will relate the same
 For the delight of a few *natural* hearts,
 And with yet fonder feeling, for the sake
 Of youthful Poets, who among these Hills
 Will be my second self when I am gone.

(ll. 21-39. 強調筆者)

注意深い読者ならば、詩人がこれから語ろうとする物語の主人公が「人間」と「自然」の両者になることを予感するに違いない。詩人は子供時代にすでに抱いていた羊飼いへの愛着を披瀝するが、その愛着は「羊飼いそのものではなく、羊飼いの仕事と住まいの場所としての野や山に起因する」と告白するからである。はじめてこの物語に触れた少年時代の詩人は、「自然の感化力」(“the power / Of Nature”, “the gentle agency / Of natural objects”)のお陰で、不十分ながらも「人間や人間の暮らし」への洞察を得たというのだ。ワーズワスは「自然愛があってこそその人間愛」という例の主張をここでも示唆している。¹¹⁾

上の詩句でもう一つ注目を要するのは、詩人が物語の読者層を具体的に特定している点である。その読者層とは“a few natural hearts”であり、“youthful Poets, who among these Hills / Will be my second self when I am gone”である。“a few natural hearts”の“natural”には重大な意味が込められている。なぜなら、「自然の心を持つ人」—— “the gentle agency / Of natural objects”に感化されうる人——でなければ真の意味で *Michael* の読者にはなりえないことを、詩人は暗に仄めかしているからである。*Michael* の詩人（ワーズワスと同等されて然るべき詩人）によって「第二の自己」と目される後世の詩人たちが当時（1800年前後）のウィリアム的／ドロシー的人物であることに疑問の余地はない。とすれば、彼らが「自然の心を持つ少数の人々」と呼ばれるのは当然のことであった。このウィリアム的／ドロシー的な理想の読者像を、我々は同じ *Lyrical Ballads* 中の詩に見出すことができる。1800年出版の2巻本詩集第1巻の巻末に置かれた *Tintern Abbey Lines* がそれである。この詩の終わり近くにウィリアムの分身(「第二の自己」)として詩人の妹ドロシーが登場する。

...Nor perchance,
 If I should be, where I no more can hear
 Thy voice, nor catch from thy wild eyes these gleams
 Of past existence, wilt thou then forget
 That on the banks of this delightful stream
 We stood together; and that I, so long
 A worshipper of Nature, hither came,
 Unwearied in that service: rather say
 With warmer love, oh! with far deeper zeal
 Of holier love. Nor wilt thou then forget,
 That after many wanderings, many years
 Of absence, these steep woods and lofty cliffs,
 And this green *pastoral* landscape, were to me
 More dear, both for themselves, and for thy sake.

(II. 147-60. 強調筆者)

この詩句の “If I should be, where I no more can hear / Thy voice, nor catch from thy wild eyes these gleams / Of past existence” の部分は、実質的に *Michael* の “when I am gone” と同趣の表現である。*Michael* の詩人(ワーズワス)は、己が語る物語の読者が “A worshipper of Nature” であることを願っている。そして、自然を見つめるその理想の読者の心にはやがて “warmer love” が, “far deeper zeal / Of holier love” が, 宿されるはずなのである。後に取り上げる *Michael* の詩行(I. 457: “There is a comfort in the strength of love;”) の “love” がこの “warmer love”, “holier love” と出自を同じくする「愛」であると言えば結論を先取りした形になるが、ここで確認しておいてよい事実である。¹²⁾ *Michael* 第34行目の “Therefore” (= for that reason) に込められた「この物語が読者に語られる理由」は、もはや明らかであろう。詩人は、これら選ばれた読者 — 自然愛の持ち主 — に対して己が(そして主人公マイケルも)体験した成長(本能的自然愛から高次の自然愛/人間愛への目覚め)のプロセスを追体験してもらいたいのである。¹³⁾

牧者マイケルの物語は第40行目から開始されるが、その冒頭の詩句(II. 40-79)はマイケルの人物(性格)描写に費やされている。そしてそこでは例の “a man, of strong mind and lively sensibility” としてのマイケルの造形が入念に行われる(See II. 44-47: “his mind was keen / Intense and frugal, apt for all affairs, / And in his Shepherd’s calling he was prompt / And watchful more than ordinary men.”)。ところで、80の齢を数えた羊飼いの境涯を語る次の詩句(II. 58-61: “he had been alone / Amid the heart of many thousand mists / That came to him and left him on the heights. / So liv’d he till his eightieth year was pass’d.”)は、*Tintern Abbey Lines* のあのドロシーへのウィリアムの呼びかけを想起させないだろうか —

...Therefore let the moon
 Shine on thee in thy solitary walk;

And let the misty mountain winds be free
To blow against thee:...

(*Tintern Abbey Lines*, ll. 135-38)

ここからも、老羊飼いとドロシーが「自然の心を持つ少数の人々」として同類の存在であることが確認できる。とすれば、上の引用に直接続く箇所が重要な意味を担ってくる。

...and in after years,
When these wild ecstasies shall be matured
Into a sober pleasure, when thy mind
Shall be a mansion for all lovely forms,
Thy memory be as a dwelling-place
For all sweet sounds and harmonies; Oh! then,
If solitude, or fear, or pain, or grief,
Should be thy portion, with what healing thoughts
Of tender joy wilt thou remember me,
And these my exhortations!...

(*Tintern Abbey Lines*, ll. 138-47)

ここに見られる詩行“*When these wild ecstasies shall be matured / Into a sober pleasure*”は、ドロシーの感覚的自然愛がより深い自然愛 — 人間愛に繋がる自然愛(“warmer love”, “holier love”) — へと変貌を遂げる未来の時を指し示している。いったんそのような境地に到達すれば、人はどのような人生の苦難(“solitude, or fear, or pain, or grief”)に遭遇しようとも、心の安らぎ(“healing thoughts / Of tender joy”)を失うことはないのだ。これが、1798年時点での妹ドロシーに対するワーズワスのメッセージであった。実は、1800年暮れの作品 *Michael* に託された詩人のメッセージも本質においてこれと異なるものではないことを、本論において筆者は主張したいのである。家庭を持つ前のマイケル、あるいは父祖伝来の土地と引き替えに息子を失う前のマイケルは、「自然の心を持つ少数の人々」の一人ではあっても、真の意味での人間愛に目覚めた人とは言えない。このマイケルが一家の悲劇を潜り抜ける過程でより高次の愛(“warmer love”, “holier love”)へと目覚め、悲しみを悲しみとして留めながらも、より深い次元で心の回復を得るに至る救済のドラマこそ、*Michael* の主題の要諦なのである。

次の詩句は、妻子(“domestic affections”の対象)を持つまでの自然児マイケルの暮らしぶりを描いて印象深い。

And grossly that man errs, who should suppose
That the green Valleys, and the Streams and Rocks
Were things indifferent to the Shepherd's thoughts.
Fields, where with cheerful spirits he had breath'd
The common air; the hills, which he so oft

Had climb'd with vigorous steps; which had impress'd
 So many incidents upon his mind
 Of hardship, skill or courage, joy or fear;
 Which like a book preserv'd the memory
 Of the dumb animals, whom he had sav'd,
 Had fed or shelter'd, linking to such acts,
 So grateful in themselves, the certainty
 Of honorable gains; these fields, these hills
 Which were his living Being, even more
 Than his own Blood—what could they less? had laid
 Strong hold on his affections, were to him
 A pleasurable feeling of blind love,
 The pleasure which there is in life itself.

(ll. 62-79)

「谷」「川」「岩」「野原」「山」という自然界の事物は、マイケルの“cheerful spirits”に日々働きかけることにより、マイケルの存在を創り上げ、ついにはマイケルその人の本質(“his living Being”)となる。いま特に注目したいのは“these fields, these hills / ... had laid / Strong hold on his affections, were to him / A pleasurable feeling of blind love, / The pleasure which there is in life itself.”なる詩句である。これを見れば、家庭を持つ以前のマイケルにとっては自然のみが「彼の愛情」(“his affections”)の対象であったことが判る。しかも彼のその愛は「盲目の愛」(“blind love”)と呼ばれて然るべき質の愛なのだ。ここで再び *Tintern Abbey Lines* を想起する必要がある。この時点でのマイケルの自然愛は、“in the hour / Of thoughtless youth” (*Tintern Abbey Lines*, ll. 90-91) と形容される1793年当時のワーズワスの自然愛 (*Tintern Abbey Lines*, ll. 73-84参照) に他ならないのである。それから5年後(1798年)の、ワイ河畔再訪時のワーズワス(当時28歳)は己の成長を次のように公言して憚らない。

...For I have learned
 To look on nature, not as in the hour
 Of thoughtless youth, but hearing oftentimes
 The still, sad music of humanity,
 Not harsh nor grating, though of ample power
 To chasten and subdue....

(*Tintern Abbey Lines*, ll. 89-94)

ここにはマイケルが物語の中で辿るべき運命が暗示されている。ウィリアムやドロシーと同類の「自然の心を持つ少数の人々」の一人として、彼は盲目的自然愛をやがてより高次の自然愛へと高めて行くことを運命づけられているのだ。物語の中心部(II. 80-456)で繰り広げられる“domestic affections”をめぐる老羊飼いの悲劇は、彼の当初の“blind love”

があつた “warmer love”, “holier love” へと深化していくために不可欠のものであつた。

以上のことを確認したからには、ここでマイケルの悲劇の顛末に立ち入る必要はない。重要なのは悲劇の〈結果〉—— 悲劇が老人の「愛」に及ぼした影響—— なのだから。¹⁴⁾ かわりに我々は、悲劇の渦中の老人が息子に対して示す愛情表現に注目しよう。息子ルークの誕生以来、それまで「自然」へ向けられていた羊飼いの “blind love” はその対象を完全にこの一人息子(と彼が相続すべき土地財産)に奪われてしまう。そのことは “Day by day pass’d on, / And still I lov’d thee with encreasing love.” (ll. 353-54) という息子への老人の告白に明らかである。老牧羊者の胸中で自然愛が家族愛と土地愛へと—— 一種の所有欲へと—— 変質していく機微を見逃さないことがここでは肝要である。

(三)

Michael の物語中でもっとも感動的かつ悲劇的な場面は、老父が息子を作りかけの羊囲いの石積みへ伴い、そこである種の誓いの儀式を行う箇所であろう。一家の土地財産を守るための犠牲となって息子ルークが他郷 (l. 453: “the dissolute city”) へ旅立つ前の日、老父は息子に石積みの「礎石」を置くことを求める。

“I knew that thou could’st never have a wish
To leave me, Luke, thou hast been bound to me
Only by links of *love*, when thou art gone
What will be left to us!—But, I forget
My purposes. Lay now the corner-stone,
As I requested, and hereafter, Luke,
When thou art gone away, should evil men
Be thy companions, let this Sheep-fold be
Thy anchor and thy shield; amid all fear
And all temptation, let it be to thee
An emblem of the life thy Fathers liv’d,
Who, being innocent, did for that cause
Bestir them in good deeds. Now, fare thee well—
When thou return’st, thou in this place wilt see
A work which is not here, a covenant
’Twill be between us—but whatever fate
Befall thee, I shall *love* thee to the last,
And bear thy memory with me to the grave.”

(ll. 410-27. 強調筆者)

老人自身が「父祖の暮らしの象徴」 (“An emblem of the life thy Fathers liv’d”) と呼ぶ羊囲みが同時に〈家族愛の表徴〉でもあることは容易に見てとれる。この点については、ドロシーの日記 (1800年10月11日の箇所) に示唆に富む記述が見られる。

After Dinner we walked up Greenhead Gill in search of a Sheepfold....The Sheepfold is falling away it is built nearly in the form of a heart unequally divided.¹⁵⁾

この不揃いの「ハート型に作られた」石積みにワーズワス兄妹が〈愛の象徴〉を連想したことは疑いない。そして、この体験は *Michael* 執筆（1800年10月～12月）の直接の動機となる。父親の求め通りに「礎石」を置いて「誓い」（“covenant”）をたてたはずのルークではあるが、やがて都会の誘惑に負け、身を持ち崩し、海外に逃亡することによって、彼は結局父親との「誓約」を破ってしまう。これが マイケル一家を襲った悲劇の結末である。

物語 *Michael* の終結部は、印象深い次の詩句で始まる。

There is a comfort in the strength of love;
'Twill make a thing endurable, which else
Would break the heart:—Old Michael found it so.

(ll. 457-59)

息子に裏切られた老牧羊者の余生を支える「力」となるこの「愛」は、もはやかつてと同じ家族愛／家庭愛ではありえない。なぜならば、その種の盲目的な愛が消えがたい煩惱の火を燃やすことはあっても、真の「慰め」（“a comfort”）をもたらすことはありえないからだ。もちろん老人のこの「愛」が先の彼の約束（“whatever fate / Befall thee, I shall love thee to the last, / And bear thy memory with me to the grave”）を体現するものであることは否めない。だが、件の悲劇の前後では息子への老羊飼いの愛に微妙な変質が生じていることを見逃すわけにはいかない。息子の失踪の知らせを受けた後のマイケルの暮らしぶり (ll. 461-62: “what he was / Years after he had heard this heavy news”) に注目しよう。彼はけっしてこの「重たい知らせ」に打ちひしがれて、「石一つ持ち上げることができなかった」 (ll. 475: “never lifted up a single stone”) わけではない。

I have convers'd with more than one who well
Remember the Old Man, and what he was
Years after he had heard this heavy news.
His bodily frame had been from youth to age
Of an unusual strength. Among the rocks
He went, and still look'd up upon the sun,
And listen'd to the wind; and as before
Perform'd all kinds of labour for his Sheep,
And for the land his small inheritance.
And to that hollow Dell from time to time
Did he repair, to build the Fold of which
His flock had need. 'Tis not forgotten yet
The pity which was then in every heart

For the Old Man—and 'tis believ'd by all
That many and many a day he thither went,
And never lifted up a single stone.

(ll. 460-75)

Matthew Arnold がもっともワーズワスらしい表現形態 (“his true and most characteristic form of expression”) の典型として激賞して以来,¹⁶⁾ 上の引用詩句の最終行 (“And never lifted up a single stone”) は一人歩きを始めた嫌いがあるが、実はこの詩行はけっして老人の最終的な心境を指し示すものではない。その証拠にこの箇所 (ll. 474-75) は、明白な事実と言うよりも、村人たちの憶測に基づくものなのだ (“'tis believ'd by all”)。事実は、次の一節にある通り、老羊飼いの不断の石積み作業を物語っている — たとえそれが未完に終わったとはいえ。

The length of full seven years from time to time
He at the building of this Sheep-fold wrought,
And left the work unfinished when he died.

(ll. 479-81)

80歳過ぎの老人 (l. 61: “So liv'd he till his eightieth year was pass'd.”) にこの気力と体力を与えたものは、たんなる息子への愛 (“domestic affections”) のみではあるまい。そのことを示唆するかの様に、老羊飼いと自然との交わり (他者を介しない一対一の交わり) の再開を詩人は抜きなく描いていたではないか (ll. 463-66: “His bodily frame had been from youth to age / Of an unusual strength. Among the rocks / He went, and still look'd up upon the sun, / And listen'd to the wind;”)。これらの詩句が *Michael* 冒頭近くの詩句 (l. 48: “Hence he had learn'd the meaning of all winds”) と呼応していることは言うまでもない。つまり、物語の終結部において再び マイケルは元の自然児へ戻ったのである。いや、「元の自然児へ戻った」という表現はかならずしも正確ではない。なぜならば、いま彼の胸裡にあるものは盲目の自然愛がかつてもたらした無邪気な喜び (l. 78: “A pleasurable feeling of blind love”) ではなく、人生の悲苦を味わい尽くした末に獲得される「愛の力に宿る慰め」(l. 457: “a comfort in the strength of love”) だからだ。

老人が過ごす7年の辛い年月 (“The length of full seven years”) は、*Tintern Abbey Lines* にうたわれているワーズワスのあの5年間 (ll. 1-2: “Five years have passed; five summers, with the length / Of five long winters!”) と等価の意味を有していたはずである。5年間の試練の時を潜り抜ける過程でワーズワスが経験した境地は次のようなものであった。

Though absent long,
These forms of beauty have not been to me,
As is a landscape to a blind man's eye:
But oft, in lonely rooms, and mid the din

Of towns and cities, I have owed to them,
 In hours of weariness, sensations sweet,
 Felt in the blood, and felt along the heart,
 And passing even into my purer mind
 With tranquil restoration:...

(*Tintern Abbey Lines*, ll. 23-31)

詩人ウィリアムとは異なり「都会の侘びしい部屋」ならぬ自然の懷に依然として抱かれて生きる老牧羊者が、7年の歳月のうちに“sensations sweet”を取り戻し、「穏やかな回復」を得るのは時間の問題である。かつての“blind love”とは異なるより深化／進化した高次の自然愛(“warmer love”, “holier love”) — それは人間愛と別物ではない — であればこそ、羊飼いはその「愛の力に宿る慰め」に老後を生きる力を付与されるのだ。これが、作品 *Michael* が「“a man, of strong mind and lively sensibility” の〈誕生〉と〈試練〉と〈成長〉と〈救済〉のドラマ」たる所以である。¹⁷⁾

マイケルが息子ルークを一時犠牲にしてまで守ろうとした父祖伝来の土地が他人の手に渡り、かつて村人に“The Evening Star”(希望の象徴)と慕われた彼の家屋も消え果てた時、後に二つのものが残される。一つはあの羊囲いの未完の石積み(“the unfinished Sheep-fold”)であり、もう一つはマイケル一家が住む小屋の戸口に聳えていた樫の木(“the Oak”)である。前者が“domestic affections”の表徴である点にはすでに触れた。後者についてもまた、ワーズワスはそこに象徴としての特別な意味を込めていたはずである。伝統的に〈樫〉は〈力〉や〈安定性・永遠性〉の象徴である。¹⁸⁾ ワーズワスは、物語の掉尾にこのシンボルを置くことによって、主人公マイケルが到達した愛(“warmer love”, “holier love”)の力がもたらす〈回復・救済〉の確かさを暗示しているのである。同時に、この「樫の木」は — グリーンヘッド・ギルの水流 (l. 491: “the boisterous brook of Green-head Gill”) と共に — もちろんあの「自然の力」(ll. 28-29: “the power / Of Nature”)の象徴でもある。¹⁹⁾ 最愛の息子の未還(未完の石積みはその表象としても機能する)にもかかわらずマイケル晩年の7年間がそれなりに充実し、完結したものであったことは、数字「7」のシンボリズム — 「7」は〈完成・成就〉や〈安定・休息〉の表徴 — に仄めかされている。²⁰⁾

(結び)

本論冒頭で触れた「ワーズワスの *Michael* に寄せる特別な想い」とは、苦難に身を置く人間を回復に導く〈自然愛／人間愛の救済力〉に対する信頼であった。ワーズワスにおいては、自然愛が直線的に人間愛に進化するのではなく、自然愛は人間愛へと深まることによってさらに高次の自然愛に生まれ変わるのである。*Lyrical Ballads*の詩人はこの意味における〈自然詩人〉であった。*Lyrical Ballads*全巻に漲るこの〈自然詩人〉の信念を、*Tintern Abbey Lines*と共に高らかに歌いあげる *Michael* がこの詩集の巻末に置かれたのは意味深いことである。ここから、*Michael*の副題である「パストラル詩」の含意も明らかになる。自然環境の中に生き、「自然」との心身両面での交わりを通して、人間としての成長と救

済を実現する「羊飼い」のエコロジカルな物語ほど“A Pastoral Poem”(「エクローグ」)の名に相応しいものはない。²¹⁾

本論冒頭に掲げたもう一つの問題——作者と主人公／牧羊者との自己同一化の問題——への解答もすでに明らかにされたはずである。主人公マイケルに「自然の心を持つ少数の人々」の一員としての造形が施されている以上、基本的にマイケルはウィリアムやドロシーの分身と見なすことができ、物語の中核部分(主人公の成長を示唆する部分)における作者ワーズワスとマイケルの自己同一化は否めない。だが、物語の大半(II. 80-456)を占めるマイケル一家の悲劇の部分にまでこの自己同一化を認めるのは誤りである(詩人の友人の Thomas Poole が老人のモデルの一人であることにはすでに触れた)。どうやら、*Michael* 批評における「二つの陣営」の主張は甲か乙かではなく、甲も乙もという形に収まりそうである。

最後に、作品 *Michael* と *Lyrical Ballads* の不吉な運命を予想させる事実に触れておく必要がある。前章で、作品末尾の〈樫の木〉が自然愛／人間愛による救済の象徴であることを指摘した。ところが同じ詩集中の、しかも“A Pastoral”という副題をもつ詩 *The Oak and the Broom* では、主人公の一人である「樫の木」は嵐に吹き飛ばされて消滅する運命を辿る。*Michael* と直接の関係は持たぬ詩ではあるが、シンボルのレベルで見れば、*The Oak and the Broom* は〈力〉や〈安定性・永遠性〉の象徴としての“the Oak”の意外な脆弱さを暗示しているようにも思われるのである。*Michael* と *Lyrical Ballads* 全体に込められた〈人間愛にまで高められた自然愛による回復・成長・救い〉というワーズワスの人間(自己)救済の構図は、詩人の心理の深層に潜む不安を免れないように見受けられる。²²⁾ 筆者は、この不安の高まりが *Lyrical Ballads* の1805年以降の——詩人の存命中の——再版を妨げたかと考えるのである。コールリッジによればワーズワスの作詩活動(*The Recluse* に集約されるはずの作詩活動)の最終目的は以下のようなものであったらしい。

He was to treat man as man—a subject of eye, ear, touch, taste, in contact with external nature—informing the senses from the mind and not compounding a mind out of the senses—then the pastoral and other states—assuming a satiric or Juvenalian spirit as he approached the high civilization of cities and towns, and then opening a melancholy picture of the present state of degeneracy and vice—thence revealing the necessity for and proof of the whole state of man and society being subject to and illustrative of a redemptive process in operation—showing how this Idea reconciled all the anomalies, and how it promised future glory and restoration.²³⁾

1805年に一応の完成をみた *The Prelude* と1814年に出版された *The Excursion* の二作は、間違いなく上の目標の実現へ向けたワーズワスの努力の成果である。しかし、前者が *Lyrical Ballads* の汎神論的世界を色濃く引きずっているのに対し、後者には伝統宗教(キリスト教)への強い傾斜が見られる。²⁴⁾ ところが興味深いことに、前者が詩人の生前には公表されなかったのに対し、後者は脱稿後直ちに出版される。ここから次のことが推測される。おそらく1805年以降のある時期から、ワーズワスは〈自然の神による救済〉に充足できず、〈キリスト教の神による救済〉に安心立命を求めるといったのであろう——その

転向の足取りは漸進的なものではあったが、〈自然との交流〉に基盤を置いた救済システム（信仰／哲学）がもはや従前の機能を果たしえなくなったとき、その種の救済のケースブック（事例集）とも言うべき *Lyrical Ballads* も役割を終えることになる。²⁵⁾ 1815年にワーズワスの最初の選詩集（‘first collected edition’）が出版される時、“Including *Lyrical Ballads*, and the Miscellaneous Pieces of the Author. With Additional Poems, a New Preface, and a Supplementary Essay.” という詩集の副題にも関わらず、*Lyrical Ballads* に出自を持つ肝心の詩群はそこではかつての統一的配列（自然による救済の構図）を奪われ、互いに異なる見出しのもとに分散して姿を現す — むしろ「姿を消す」と言うべきか — ことになる。その結果、この詩集では *Michael* も *Tintern Abbey Lines* もかつての特権的場所を失ってしまう（代わりに全巻の巻末を飾るのは、「自然」がもたらす靈感の喪失を嘆くあの *ODE. — Intimations, &c.* であった）。この皮肉な事実を通して、我々は *Michael* と *Tintern Abbey Lines* の類縁性を — ワーズワスのロマン主義（自然／人間神秘主義）の頂点に位置する詩としての類縁性を — 改めて知らされるのである。

注

- 1) 本論は日本学術振興会の平成13年度科学研究費補助金による研究成果（課題番号：11610498）の一部である。
- 2) このあたりの批評の動向については、David B. Pirie が手際良い見取り図を描いている。Cf. David B. Pirie, *William Wordsworth: The Poetry of Grandeur and of Tenderness* (London: Methuen, 1982), pp.112-18.
- 3) *Michael* と *Tintern Abbey Lines* の類縁性を指摘する批評家に Peter J. Manning がいる。彼の論点は、二つの詩が“The distance between the consciousness of youth and that of the perhaps wiser but surely more constrained adult” を扱う作品だという点にある。しかし、“his [a Wordsworth’s/Michael’s] development has betrayed his childhood integration” や “the failure of nature’s support recorded by the poem [*Michael*]” という表現に窺われる彼の読みは、私のものと根本的に異なる。また本論は、“The passage from nature in *Tintern Abbey* to the emblem in *Michael* is indicative of Wordsworth’s development between 1798 and 1800....” という彼の説を採らない。筆者の考えでは、ワーズワスの「自然」に対する思想的立場が目に見える形で変化 — これを〈成長〉と見るかどうかはまた別の問題であるが — し始めるのは1805年あたりからである。Cf. Peter J. Manning, *Reading Romantics: Texts and Contexts* (Oxford: Oxford U. P., 1990), pp.47-48, 51-52nn.
- 4) See E. de Selincourt, ed.; Chester L. Shaver, rev., *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years* (Oxford: Clarendon Press, 1967), pp.312-15. 以下、E. Y. と略記。
- 5) See E. Y., p.313.
- 6) E. Y., pp.314-15.
- 7) *Michael* をはじめ *Lyrical Ballads* (1800年版) 収載作品からの引用は、R. L. Brett and A. R. Jones, eds., *Lyrical Ballads* (London: Methuen, 2nd ed., 1991) に拠る。また、*Lyrical*

Ballads については適宜以下の文献を参照した: James Butler and Karen Green, eds., *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800 by William Wordsworth* (Ithaca, N. Y.: Cornell U. P., 1992); Michael Mason, ed., *Lyrical Ballads* (London: Longman, Longman Annotated Texts, 1992)。

- 8) See *E. Y.*, pp. 322-23.
- 9) *E. Y.*, p. 322.
- 10) 作品 *Michael* において発揮される「ワーズワスの倫理的発見が持つ力」を指摘する Mary Moorman は、この詩のモラルの中核に迫りながらも、主人公の成長と救済のプロセスで〈自然〉が果たす役割を見過している。See Mary Moorman, *William Wordsworth: A Biography*, 2 vols. (Oxford: Oxford U. P., 1957), I, p. 500: "...the power of Wordsworth's ethical discovery that suffering, when illuminated by love, creates its own nobility of heart."
- 11) 自伝的長編詩 *The Prelude* (1805年版) の第8巻に、ワーズワスは "Retrospect.—Love of Nature Leading to Love of Mankind" という副題をつけた。ちなみに、この第8巻 (ll. 222-311) には詩人が当初 *Michael* のために書いた詩行が用いられていて興味深い。See E. de Selincourt, ed.; Helen Darbishire, rev., *The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (Oxford: Clarendon P., 1959), p.578.
- 12) その意味で、引用詩行 (l. 59) に見られる "this green pastoral landscape" はマイケルの目に映る自然の光景と等価のものである。
- 13) 「偉大な詩人」の使命に触れるワーズワスの1802年6月7日付書簡の次の一節は、詩人が作品 *Michael* に託した想いを代弁しているように思われる。See *E. Y.*, p.355: "... he [a great Poet] ought to a certain degree to rectify men's feelings, to give them new compositions of feeling, to render their feelings more sane pure and permanent, in short, more consonant to nature, that is, to eternal nature, and the great moving spirit of things." ついでに言えば、この一節と *Tintern Abbey Lines* の詩句 (ll. 101-03: "A motion and a spirit, that impels / All thinking things, all objects of all thought, / And rolls through all things.") との類似は偶然ではありえない。
- 14) *Michael* における「事件」の欠如は作者自身が認めるところである (See l. 19: "though it be ungarnish'd with events")。本論と異なる視点からではあるが、Karl Kroeber は *Michael* における事件の因果関係の希薄さを次のように指摘する。See Karl Kroeber, *Romantic Narrative Art* (Madison, Wisconsin: Univ. of Wisconsin P., 1960), p. 81: "Causal relations between incidents are not dramatized. Events simply occur in temporal succession, and the question of why they occur as they do is virtually neglected. A dramatist or novelist dealing with the subject of *Michael* would almost surely stress the conflict between the shepherd's love of his son and his love for his property. Wordsworth minimizes that conflict..."
- 15) Pamela Woof, ed., *Dorothy Wordsworth: The Grasmere Journals* (Oxford: Clarendon P., 1991), p.26.
- 16) See Graham McMaster, ed., *William Wordsworth: A Critical Anthology* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1972), p.233. Arnold は指摘していないが、この一行 ("And

never lifted up a single stone”)には先の“this heavy news”の“heavy”との心理的地口が働いており、詩人の並々ならぬ力量を改めて認識させられる。

- 17) まさにこの意味で、*Michael* は「粗末な服を身に纏った人間が物事を深く感じることができる(“can feel deeply”)のを示すために書かれた」作品と言える。
- 18) Cf. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (1974; Amsterdam: North-Holland Publishing Company, rev. ed., 1984), ‘oak’, p.347.
- 19) Jonathan Wordsworthは*Michael* (ll. 487-88)に次の注解を添えている — “Like the elms that stand beside Margaret’s ruined cottage, the oak survives as the representative of an abiding and dispassionate natural order. Man comes, and man goes; the trees remain.” See Jonathan Wordsworth, ed., *William Wordsworth: The Ruined Cottage, The Brothers, Michael* (Cambridge: Cambridge U. P., 1985), p.82n.
- 20) Cf. Ad de Vries, *op. cit.*, ‘seven’, p.415.
- 21) *Lyrical Ballads* がいかに「パストラル」的要素の強い詩集であるかについては、Stuart Curran, *Poetic Form and British Romanticism* (Oxford: Oxford U. P., 1986), pp.85-107を参照。同書は、*Lyrical Ballads* 全体が伝統的ジャンルとしての「パストラル」をいかに同化し、またこれに挑戦してもいるかを論じて有益である。
Lyrical Ballads 収載の「パストラル」詩群(特に *The Brothers*)には反パストラル要素 — 牧歌的世界を脅かす破壊的要因 — が見受けられるが、作品 *Michael* はそれらの要素を老羊飼いの悲劇に集約させた形で描き出し、結局は自然と人間の交流・調和のうちに主人公を救済することでパストラルの伝統を守っている。このこととの関連で注目したいのは、1815年詩集において *The Brothers* が“A Pastoral Poem”という副題を奪われるのに対し、*Michael* は最後まで“A Pastoral Poem”というサブタイトルを失わない事実である。
- 22) たとえば、*Tintern Abbey Lines* では、同種の自己救済のドラマを開陳した後でワーズワスは“If this / Be but a vain belief” (ll. 50-51) という留保を付け加える。ここにはいくばくかの詩人の不安が顔を覗かせている。
- 23) Carl Woodring, ed., *Table Talk*, in *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, 2 vols. (Princeton, N. J.: Princeton U. P., 1990), I, pp.307-08.
- 24) *The Excursion* においては、「牧師」(“Pastor”)の話という意味での‘Pastoral’に物語全体が大きく傾斜していく傾向が窺われる。Cf. *OED*, ‘Pastoral’, a. and sub., A. II. 4., B. II. 5.
- 25) *Michael* には“Heaven’s good grace” (l. 187) や “God’s love” (l. 239) という語句が見えるが、主人公の羊飼いが基本的に“A worshipper of Nature”(*Tintern Abbey Lines*, l. 153) であることは否めない。

Wordsworth, Eclogue, and Ecology—On the 'Pastoralism' of *Michael*

Shoichi Yamauchi

My objectives in this paper are summarized as follows. First, I examine the relationships between *Michael* and *Tintern Abbey Lines*, which have been ignored by critics. Second, in light of Wordsworth's faith cherished in *Tintern Abbey Lines* ("Nature never did betray / The heart that loved her") I clarify the meaning of the line in *Michael* "There is a comfort in the strength of love". My claim is that this line evokes the true theme of the poem: the theme of man's restoration to his physical and mental health by "the power of Nature". Third, I consider the extent to which Wordsworth identified himself with the protagonist in *Michael*. Fourth, I offer an ecocritical reevaluation of the pastoral poems of Wordsworth in terms of the 'therapeutic' effects that such poems may have on the modern reader. Finally, I suggest that Wordsworth's pastoral—or natural—poems may have provided only a limited means of 'salvation' for the poet in his later years.